

れることは可能なことであり、コミュニケーション技術という一番基本的ではあるが課題となっていることに対して有用であると考えられる。

今後の展望として2点あげる。1点目に、学習の中にどのようにホスピタリティの精神を取り入れていくのか。その指標などについて今後の検討としなければならない。また2点目として、ホスピタリティという概念を学生に教えていく中で、学生自身はどのように取得していくかを捉えることが必要である。

なお、福祉援助学科において、昨年より、ディズニールゾートでのオリエンテーションゼミナールを通して、より身近に「ホスピタリティ」という概念を体感する試みを行っている。その中で、学生が「ホスピタリティ」について、始めどのように捉え、その後課外活動を通してどのように考えていくのかについて、事前、事後の学習シートを通して変化を見ていく。今後その2点について検討していきたい。

引用・参考文献

1. 林田正光. ホスピタリティの教科書. 東京 : あさ出版.
2. 鎌田實. 超ホスピタリティ. 東京 : PHP出版.
3. 服部勝人. ホスピタリティ学原論. 東京 : 内外出版, 2004.
4. 笠原路子. 特集 サービスを越えてホスピタリティの時代へ. (3), TPIS 学生援護会, 2005年, 第35巻. 4~11.
5. 海老原靖也. ホスピタリティ入門. 東京 : 大正大学まんだらけライブラリー, 2005.
6. 鷺田清一. 思考のエシックス. 京都 : ナカニシヤ出版, 2007.
7. 三好明夫・沖田勝美. 介護技術学. 東京 : 学文社, 2007.
8. 古閑博美. 介護のホスピタリティ. business risk manegement. ビジネスリスク経営研究所, 2006. 21(6) 30~35.
9. 高良聖. サービス業としての臨床心理士. この科学, 2006年, 第125巻. 2~7
10. 小松田勝. ディズニールランドのホスピタリティ. business risk manegement. ビジネスリスク経営研究所, 2006. 21(6) 24~29.

福祉援助への応用を目的とした「遊び心」概念の整理

杉本豊和・柴生田美里・西方規恵・草野篤子

研究目的

「遊び心」とは、日常生活における生きがいを担保するものであると考える。要援護者は、日常生活を遂行するにあたっての障害を有しており、その障害を克服・軽減するために日々努力を行い、その営みに対して専門職は福祉援助を実施している。しかし、人間はただ日常生活を遂行するためだけに存在しているのではない。そこには生きがいや日々の「楽しみ」、余暇というものが必要不

可欠である。従来、福祉分野ではQOLの概念が導入され、どのようにこれを高めていくかが課題とされてきた。また古くは心理学者マズローが人間の本源的欲求にとって「自己実現」は最高度のニーズであることを提起した。我々は、こうした一連の日常生活上における領域を総称して、「遊び心」と仮に定義してみたい。

人々の生活・人生には適度な「遊び心」が欠かせないと思われる。これは生活・人生に潤いとや

りがいをもたらすものである。治療を行なっている患者、教育を受けている児童・生徒、そして福祉援助を受けている利用者がどのようにすれば「遊び心」を持つことができ、充実した生活・人生を送ることができるのか。これは従来の福祉援助にはなかった、実践にとっても重要な課題であると考えている。

研究方法

これらの目的意識から、本研究では福祉援助と「遊び心」の関連性を明らかにすることを目的に、研究の第一段階として文献研究を実施した。

国立情報学研究所が運営する文献検索サイト「論文情報ナビゲータ」を使用して、「遊び心」をキーワードに検索した結果、251件の文献がヒットした。その中から本研究に使用できそうな、できるだけ多分野で、大人を対象とした論文52件の文献を検討した結果、37編の論文を分析対象とすることとした。各論文を研究班で分担して読み、その結果をKJ法を用いて集团的に検討した。

結果

文献研究にて収集した37編の論文が「遊び心」をどのように定義しているのかをKJ法を用いて分析した結果、以下の6つの因子を確立した。すなわち①「『仕事』との対義語」、②「ゆとり」、③「楽しみ」、④「実践概念」、⑤「コミュニケーション能力」、⑥「『仕事』に活かすもの」の6点である。以下、それぞれの因子について概説する。

①「『仕事』との対義語」としての「遊び心」

森岡は、どんな仕事にも「遊び心」が存在してこそ、一人前であるとし、「遊び」の反対語に「仕事」を位置づけている。「遊び＝ゆとり、余暇、自由」と考えて使用している。

三浦は、「遊び心」を生態レベルで考察し、「遊び＝遺伝子プログラムに記憶された基本的本能」と捉えている。また、人間社会において、「遊び心」を仕事の応用として考えたとき、仕事に中に

創意工夫という探索行為をみつけることができれば、仕事を楽しむことができる、つまり「遊び心」が充足されるということであるとした。逆に仕事に苦痛なのは、「仕事は意志に反することもやらねばならず、自己都合の探索ばかりができる訳ではないからである」と結論づけている。

竹下は、日本と英国との退職後の生活の意識調査についての報告の中で、特に「遊び心」が仕事執着心にかかわる関係の強さに焦点をあてていたとした。その結果、日本人は仕事も趣味とする生き方を良しとしてきた特殊な精神環境に置かれてきたことから、定年退職後では現役時代と相当違った生き甲斐の精神構造が構築されるとしている。

②「ゆとり」としての「遊び心」

中村らは、病院内の小集団活動の取り組みにおいて、「遊び心」＝「ゆとり・余裕」が生まれ、仕事に楽しく感じられ、やる気出た、という結果から「遊び心」を使用している。

佐藤らは、「遊び心」＝仕事の褒賞として使用している。仕事場にそうした「遊び心」を持ってギスギス感を解消することが、会社の業績につながるとした。

鳥井は、事業独立の中で、開業の動機を語る上で「遊び心」を使用している。無理をして始める事業は長続きしない、失敗してもいつでもやめられるという体勢でなければ成り立たないという考え方である。つまり「遊び心」＝「余暇」「暇つぶし」「ゆとり」の意味として使用している。

加藤は、一般的に「遊び」は仕事の二義的にしか捉えられていないが、「遊び」はもっと真面目な機構を果たして人間文化の本質的基盤と密接に関わり合うものだとしている。また、遊びにはリラックスさせてくれるものやゆとりをもたらしてくれるものの他にスリルや競争的なものなど多種多様なものがあるとも主張している。

③「楽しみ」としての「遊び心」

的川は、日本最初の性能計算書の表紙にユーモ

アを用いたラベルを考案した。「なくても支障はないが、あれば楽しみをもてる」という意味で「遊び心」を使用している。

伊地知は、地域に根ざした活動を提供するため、「楽しい・遊び心」のある企画を考えた実地報告を行なっている。

飯泉は、「遊び心」の充足感＝「楽しみ」としている。研究活動中での「遊び心」＝「探究心」をもって取り組んでいくことの重要性を説いている。

④「実践概念」としての「遊び心」

中野は、「遊び心」という遊び手の心情を直感的に言い表せるうまい言葉が日本語にあるという。面白さ・ユーモアに加えてゆとり、しゃれっけ、茶目っけ、無邪気さを含んでいる。「ふざけ・冗談・からかい・いたずら」などは、この遊び心に満ちた行為を表現しているとした。これらの行為には、意地悪、攻撃など悪意をもつ二面性がある。また、これらの行為は相手との相互的楽しさを追求するやりとりである。さらに、そのやりとりは親しい間柄ほど認められる。最後にその行為が遊び心に根ざしたものであることを相手に伝えるメタ・コミュニケーションが成立しているとまとめている。

北島は、教育における「遊び心」について、子ども達が元来持っている「遊び心」こそ遊びそのものを豊かにし、仲間をつなげていくカギになるとしている。子どもが元々もっている「遊び心」をいかに動かすことが出来るかが、指導のテクニクであるとする。「遊び心」＝「(仲間と)楽しむ心」として使用している。

⑤「コミュニケーション能力」としての「遊び心」

榎本は、仕事のモチベーションを上げるための基礎的力として「遊び心」を定めている。ここでは、仕事＝「学習力」「対人力」「対自己力」「問題解決力」とし、その源泉に「楽天性」を位置づけている。この中の「対人力」と「対自己力」について、「対人力」は他人とうまく関わる能力、「対

自己力」は自分を律する能力としている。

⑥「『仕事』に活かすもの」としての「遊び心」

山津は、詩人フロストの創作過程において、「遊び心」を仕事の中での「命がけの遊び」という意味で使用している。仕事自体を楽しむ心、その心が欠けてしまえば、詩人は成り立たない、という考え方である。フロストに関しては、この「遊び心」があるからこそ、その詩に価値がある、と解釈している。

中村は、「遊び心」＝「コンビビアリティ」に例えている。「コンビビアリティ」とは「宴席が盛り上がっている様子」である。研究のあり方として、基礎研究があり、それを普及するために「遊び心」は外せない、としている。「遊び心」があるからこそ、その研究効果を活用してみようと試みようとするからだとし、今後の研究開発に必要としている。

平井は、仕事の合間の余暇活動（＝「遊び心」）が、仕事の発想力になる、としている。

結論

文献を概観すると、「遊び心」は、大きく分けると、①「遊びそのもの」と、②本来は遊びではないが、(仕事や課題遂行に) ゆとりや楽しみとして活用するもの、という2通りの使用のされ方をしていることがわかった。したがって、我々が福祉実践への「遊び心」応用可能性を検討したら、後者の意味づけとして「遊び心」を使用することになると思われる。すなわち、研究目的にもあるように、福祉利用者が援助者の援助を受けながら日々送っている、ある意味「厳しい」生活や人生に、ゆとりや楽しみとしての「遊び心」を持ってもらおうというものである。その意味では、今回抽出した因子の中では、「実践概念としての遊び心」がその中核をなすものであり、手法として「コミュニケーション能力としての遊び心」が用いられる可能性があることがわかった。

また、利用者自身の生活や人生に「遊び心」を

持ってもらふことと、援助や指導そのものにも、
ゆとりや楽しみを与えるために「遊び心」が有用
なのではないかという仮説を立てることもできる。

今後は、これら2つの視点で、具体的にどのよう
に福祉援助に「遊び心」を応用していくことが
できるのかという研究をすすめていく必要がある。
次年度の課題としたい。

参考・引用文献

- 的川泰宣「宇宙よもやま話 ロケット打ち上げの
『遊び心』」,『世界週報』通巻 4277 号, 時事
通信社, pp 64~65, 2007
- 榎本和生「私の考える能力開発『遊び心』を持っ
て仕事をしよう (第 3 回)『問題解決能力』
と『楽天性』」,『能力開発』通巻 324 号, 中央
職業能力開発協会, pp 2~6, 2006
- 榎本和生「私の考える能力開発『遊び心』を持っ
て仕事をしよう (第 2 回)対人力と対自己力」
『能力開発』通巻 323 号, 中央職業能力開発
協会, pp 2~6, 2006
- 中村美穂, 徳田佳子, 榎本真樹, 「事例 3 小集
団活動による臨地実習を楽しく, 効果的にす
る試み — 実習を楽しくしよう — 北 10 病
棟 (内科病棟) (遊び心と真面目心のミックス
で追求する 香川県立中央病院看護部の平成
16 年度小集団活動の実践と報告)」,『看護
部マネジメント』通巻 200 号, 産労総合研究
所, pp 18~45, 2005
- 山津さゆり「フロストの遊び心」,『経済理論』通
号 320 号, 和歌山大学経済学部, pp 77~93,
2004
- 「特集『遊び心』でおもちゃを越える タカ
ラの発想力」,『エコノミスト』通巻 3662 号,
pp 87~92, 毎日新聞社, 2004
- 森岡邦彦「パーサーのひとりごと (3) 遊び心と
『おもてなし』」,『日本海事広報協会』通巻
164 号, pp 74~77, 日本海事広報協会, 2004
- 「社内活性 遊び心で社員のモチベーション
アップ」,『月刊ベンチャー・リンク』通巻
319, 株式会社ベンチャー・リンク, pp 42~
45, 2003
- 松尾博志「'大人のお遊び心' に応えて V 字回復
を実現…佐藤慶太・(株)タカラ社長に聞く」,
『商工ジャーナル』通巻 326 号, pp 26~29,
日本商工経済研究所, 2003
- 鳥井弘之「第 173 回講演会 これからの研究開発
— 求められる遊び心」,『日機連月報』通巻
598 号, pp 36~44, 日本機械工業連合会,
2002
- 中村聡樹「五十代からの挑戦・定年は自分で決め
る (9) 遊び心でつかんだ一筋の光明 — 二度
の独立で求める仕事の醍醐味」,『fai』通巻
120 号, pp 25~55, 富士総合研究所, 1999
- 三浦晴男「えっ, 仕事しかできないって?! 遊び
心のツールと意味についてのお話」,『月刊下
水道』通巻 300 号, pp 122~124, 環境新聞
社, 1999
- 伊地知正行「地域・楽しさ・遊び心, 対話」,『ご
み』市民ネット第 2 号, pp 35, 産廃物学会,
1998
- 加藤鉄三郎「自分探求と遊び心」,『進学と人文』
通巻 38 号, pp 47~56, 大阪キリスト教短期
大学, 1998
- 飯泉 仁「遊び心」,『レーザー研究』題 25 号,
pp 195, レーザー学会, 1997
- 平井 工「アイディア玉手箱 (9) 遊び心をアイディ
アに活かそう」,『新電気』第 50 号, pp 60~
63, 1996
- 竹下 隆「定年後シニアの仕事執着意識と遊び心
の分析研究 — 企業 OB 会の実証研究を中心
に」,『シニアプラン開発機構』通巻 7 号,
pp 73~104, 1996
- 中野 茂「遊びの発達論再考 — 'ため' の遊び
論から '遊び心' へ (遊びが育てる <特集>)」,
『児童心理』通巻 49 号, pp 1298~1304, 金
子書房
- 北島尚志「広がれ, 子どもの大人の遊び心」,『教
育』第 42 号, pp 94~99, 国土社, 1992